

火祭り考

私は、「[邪馬台国と古代史の最新](#)」の第5章「[葛城王国](#)」で述べたように、今西錦司は学識の他に特別の直観力を持った人である。今西錦司の他には、白州正子を除いて、そのような人を私は知らない。白州正子は、もちろん今西錦司とは学術分野が違うけれど、彼女もその専門分野の学識については群を抜いている。青柳恵介が「文献の上からは何ほどのことも言えないその思想の芽生えに白州さんは目を凝らす。〈黙して語らぬ木や石〉がとうとう口を開くまで目を凝らす。」と述べているが、彼女はまさに特別の直観力を持っているということだろう。白州正子は、今西錦司と同じように、直観の人である。彼女の著作には、他の追従を許さない学識と直観力によって、目から鱗(うろこ)が落ちるような真実がちらりばめられている。

その白洲正子の名著に「かくれ里」(1991年4月、講談社)がある。その中に「山国の火祭り」という随筆があつて、次のように書いている。すなわち、

『 京都は花背原地町の[峯定寺](#)の前に、[美山荘](#)という料理旅館があつて、おいしい山菜料理を食べさせてくれる。(中略)部屋のすぐ前を小川が流れているが、この辺では[寺谷川](#)と呼んでいるが、原地の部落で本流(嵐山を流れる桂川の上流)と一緒にになり、今夜の火祭りはその二つの川が寄り添う「河内」で行われる。(中略)ドライブと山登りの後のお酒はおいしかった。十時頃にはいいご機嫌になって、暗闇の中を「河内」まで、どこどういったのかさっぱり記憶がない。突然、目の前が開けて夢のような光景が現れた。正面の山から、前の田圃へかけてまばゆいばかりの火の海である。その間を松明をかかげて、おそろしい勢いで火をつけて回る人影が、まるで火天か韋駄天のように見える。夢ではないか、狐につままれたんではないかと、私は何度も目をこすった。』

『 こうして書いていても、あの夢のような風景が、今もって現実のものとは思われない。私はまだあの夜の酔いがさめないのであろうか。それとも狐に化かされたのか。』

『 観光とはまったく関係のない自分たちだけのお祭り、太古のままの火の行事は、私が見た多くの祭りの中でもっとも感動に満ちた光景だった。大文字や、鞍馬の火祭りに失われたものが、ここには残っていた。いささかも仏教臭のない、健康な喜びと感謝の祈り、そこには人間が初めて火を得た時の感激がよみがえるかのように見えた。』

『 つい最近まで、同じような火祭りが、各部落で行われていたというが、現在残っているのは、原地と広河原だけで、ついでのことにそちらの方へまわってみることにする。広河原は、原地からは上流にあり、着いた時は、ちょうど「松上げ」にかかったところであった。原地とはちょっと違った雰囲気、山はないかわり、広い河原が見渡す限り地松で埋められ、炎が水にうつってきれいである。やがて、めでたく火がつき灯籠木が倒されて、すべてとどろりなく終わった。このような火祭りが、方々の部落で行われた頃は、さぞか

し壯観だったことだろう。火の祭りは、同時に、水の祭りであることもよくわかった。してみると「拝火」より「火伏せ」の方に重きがおかれたに相違ない。二月堂のお水取りにも、火天と水天が出るが、その時用いられる籠松明が、灯笼木を模していることも注意していい。山国に発生した火祭りは、そういう風に形をととのえて、仏教に取り入れられ都会へ運ばれていったのであろう。』・・・と。

東大寺二月堂の火祭りは、実忠によって始められたということは、多くの人の知るところであるが、白洲正子が言うように、二月堂の火祭りの起源が京都市左京区花背原地町や広河原能見町の火祭りにあるなどということは、誰一人言った人はいない。花背原地町や広河原能見町の火祭りは、上述のように、白洲正子は「夢のような風景」と言っているので、私はずっとそのことが気になっていた。そこで、今回、花背原地町や広河原能見町の火祭りについて調べることとした。

では、花背原地町や広河原能見町の火祭りがどのようなものか、その点を見てみたい。まず、花背原地町の火祭りについては、いくつかのYouTubeがあるのでそれらをご覧ください。

<https://www.youtube.com/watch?v=NN4xII3JV6k>

<https://www.youtube.com/watch?v=C7-7R71oz2w>

これでおおよその感じはつかんでいただけれると思うが、火祭りの詳細は判らない。しかし、広河原の火祭りについて、詳細の判る素晴らしいホームページがあるので、それを紹介しておきたい。

http://blogs.yahoo.co.jp/ken3m_kyoto/34666092.html

凄いでしょ。凄い！凄いの一言に尽きる。

さて、白洲正子は、「かくれ里」(1991年4月、講談社)の中で『そう言えば、二月堂のお水取りの水は、若狭に通じているというが、その「若狭井」の元は遠敷郡(おにゅうぐん)にあり、花背原地町や広河原能見町からあまり遠くない。若狭から大和へ行くには、花背を越えるのが一番の近道なのである。お水取りの行事は、若狭に始まり、愛宕を越えて奈良に移っていった、長い歴史を暗示していると思うが、それはある時代の豪族の移動を物語っているのかもしれない。そういう事実がなかったら、東大寺二月堂の「若狭井」の伝説は、あまりに突拍子もない話で、伝説がそう架空なことのでっち上げる筈はないのである。各部落で行われたという火祭りは、その道順を示しているのではあるまいか。鞍馬の火祭りも、京都の大文字も、もしかするとそういう人たちが落としていった火種かも

しれない。』と言っているのです、東大寺二月堂の「若狭井」の伝説について説明するとしてしよう。

以下の神宮寺に関する文章は、福井県教育研究所のホームページを基づいて作成している。多少は修文はしているが、ほとんどは福井県教育研究所のホームページ掲載のものであるので、この場を借りて福井県教育研究所に敬意を表しつつお礼を申し上げる。修文下部分は、**以下の文章の中で緑色で示した。**

奈良東大寺の「お水取り」に先がけて、**神宮寺**ならびに**遠敷川（おにゅうがわ）・鵜の瀬（うのせ）**でおごそかに繰（く）り広げられる伝統的な神事がある。毎年3月2日に行われ、奈良東大寺・二月堂への「お水送り」となる神事である。春を告げる行事として全国的にも有名な奈良東大寺二月堂の「お水取り」。その水は、若狭小浜の「鵜の瀬」から送られ、10日かかって東大寺二月堂の「若狭井」に届(とど)くとされている。それが古くから伝えられている「若狭井」の伝説である。

その神宮寺であるが、和銅7年（714）、白石明神直系の「和の朝臣・赤磨（あかまろ）」が神願寺を建立し、遠敷明神（おにゅうみょうじん）をまつたのが神宮寺の始まりである。

若狭では、良弁（ろうべん）は、若狭小浜の下根来（しもねごり）（白石）出身とされているが、大仏建立に、良弁は**当時若狭にて修行中のインドの渡来僧・実忠（じっちゅう）**が招いたという。そして、天平勝宝4年（752）、その実忠が東大寺二月堂を建立し、修二会（しゅじえ）を開いて全国の神々を招いた。ところが、遠敷明神が漁に夢中で時を忘れて遅刻（ちこく）し、そのおわびに本尊（ほんぞん）に供えるお香水を若狭から送ると約束したという。そして、二月堂の下の岩をたたくときれいな水が湧（わ）き出したと伝えられ、その湧水（ゆうすい）に命名されたのが「若狭井」である。**のちほど、NHKの特別番組で放送された「二月堂お水取り」を紹介するが、その中に、「若狭井」からお水を汲む音が出てくるのでしっかり聞いてもらいたい。「若狭井」の中にカメラを入れることは許されないのだそうで、その音が録音されただけでも誠に貴重なものである。**

遠敷川（おにゅうがわ）・鵜の瀬（うのせ）の送水神事については、詳しいホームページがあるので、それを紹介する。

<http://wakasamama.blog25.fc2.com/blog-entry-515.html>

それでは「二月堂お水取り」を紹介するとしてしよう。これは誠に貴重なアーカイブである。

<https://www.youtube.com/watch?v=5aIoGxegnNA>

次に、二月堂の火祭りを始めたという実忠なる人物がどのような人物なのか、その点を説明したい。私は、私の歴史的直感として、実忠は中国経由で日本にやって来た渡来人で、ゾロアスター教の祭典を日本に伝えた人ではなかろうかと思った。そんなことからまず読んでみた本は「日本・ユダヤ封印の古代史2、＜仏教・景教＞」（久保有政とケン・ジョセフの共著、2003年3月、徳間書店）である。その本はつぶさに読んだけれど、なかなかの本で、おおむね歴史的事実を述べていると思う。それには、『森山諭氏は、その著書「神道と仏教とをただす」（ニューライフ出版）の中で、**竜樹（りゅうじゅ）が授かった大日経の内容は太陽崇拝、バラモン教、基督教、ゾロアスター教などの影響を受けた混合宗教であったと、述べています。**』と書かれており、私たちが考えているより、ずっとずっと古代から世界の東西交流はシルクロードを中心に盛んであったことを明らかにしている。そこで、私の直感に自信を持ち、いろいろと調べてみた。それを最後に説明しておきたい。

私は、今まで中国との友好親善のために、いろいろと勉強もし考えもして来た。まだ老子について書き足りないところが残っているので、全体として完成していない上に、今まで書いた部分に訂正箇所も見つかったので、老子について加筆が終わったら全体の編集をやり直したいと考えているが、とりあえず、今まで書いた日中関係と道教と中国伝来文化については、以下の通りである。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/miteikou.pdf>

その内、中国伝来文化に関しては、第1章が「道教に想いを馳せて！」であり、その第2節において「明日香」の伝来文化について書いた。その第1項が「道観・両槻宮」であり、第2項が「道教思想の顕われ・山形石と石人像」である。その第2項「道教思想の

顕われ・山形石と石人像」の中で、私は、ゾロアスター教のことを次のように書いた。すなわち、

『中国伝来の文化の中に道教文化と祆教（ゾロアスター教）文化があった。したがって、石神の庭には築山と池の他に、中国伝来のさまざまな石造が作られた。須弥山石と石人像は道教のものだが、その他の石造については、中国伝来のものであろうが詳細はよく判らない。須弥山石と石人像は明らかに道教のものであるが、噴水の仕掛けの部分については、どうも祆教（ゾロアスター教）文化の技術によるものらしい。松本清張は、祆教（ゾロアスター教）の影響を重視している』・・・と。

松本清張は古代史ミステリーの代表的長編『火の路』を書いた。『火の路』のあらすじは、『カメラマンの坂根要助は、奈良県明日香村の石造遺跡を取材中、遺跡を真剣に観察する女性・高須通子に出会う。通子は奈良市内に宿泊していたが、散歩中に法華寺の近くで男が刺されているのを発見する。被害者・海津信六に同情した通子は供血を思い立つが、病院に向かう途中で坂根と再会した。海津の歴史学徒時代の噂を耳にした坂根は、海津周辺の人間関係に疑問を抱くようになる。他方、論文「飛鳥の石造遺物」を発表した通子のも

とに、海津から供血の礼を兼ねた丁寧な感想が届いた。海津との議論や文通のやりとりによって自らの仮説を検証していく通子は、イラン行きへの思いを深める。』というものだが、その『火の路』でゾロアスター教が日本に来ていたのではないかという仮説を取り入れている。

伊藤義教（いとう ぎきょう）という人がいる。1909年生まれで1996年に亡くなったが、京大の名誉教授をしていた人である。日本オリエント学会名誉会員でもあり、その著書には、「古代ペルシア 碑文と文学」「ペルシア文化渡来考」「ゾロアスター研究」「ゾロアスター教論集」などがある。ゾロアスター研究の権威としても知られている。伊藤義教は、当初、松本清張の説を一笑に付していたようであるが、どうも松本清張の説が気になっていたようで、その後、研究を重ねて、最終的には松本清張の説を肯定、「ゾロアスター教伝來說」を唱えられた。そして、『ペルシャ文化渡来考-シルクロードから飛鳥へ』（2001年4月、筑摩書房）という本を書かれた。その本は、『古代のアジア世界では、現代人の想像をはるかに超えて人・物・情報の往来が頻繁だった。土木・工芸の先進技術、エグゾチックな意匠や宗教儀礼、占星術など来日ペルシア人の足跡は驚くほど多く、広い。イラン学の高度な成果と彼自身の碩学による精緻な考証によって、ゾロアスター教は本当に伝来した。』・・・という内容のものである。伊藤義教によれば、実忠という名前もペルシャ語で解釈でき、この人自身がイラン系の人物だという。

さて、「実忠インド人説」というのが多くの人によって唱えられている。そのことに関連するをホームページを紹介しよう。

http://repository.nabunken.go.jp/dspace/bitstream/11177/1827/1/BA51385198_005_009.pdf

<http://oshiete.goo.ne.jp/qa/5777988.html>

[http://www.chikumashobo.co.jp/product/9784480086 ...](http://www.chikumashobo.co.jp/product/9784480086...)

<http://www.ffortune.net/fortune/onmyo/unose/roben.htm>

この他に、私のお薦めの学術研究論文に坂井隆という人の「古代における仏塔の伝播」という論文がある。

<http://enlight.lib.ntu.edu.tw/FULLTEXT/JR-MISC/misc168127.pdf>

19世紀ドイツの哲学者ニーチェの主著「ツウラトウストラはこう言った」はニーチェの40才ごろに書かれた。ミトラス教は、古代ローマで繁栄した、太陽神ミトラスを主神とす

る密儀宗教である。普通、ミトラス教は古代のインド・イランに共通するミスラ神(ミトラ)の信仰であったものが、ヘレニズムの文化交流によって地中海世界に入った後に形を変え、主にローマ帝国治下で紀元前1世紀より5世紀にかけて発展、大きな勢力を持つにいたったと考えられている。そのミトラスがツァラトウストラとそっくりだと林道義は言っている。ミトラスはゾロアスター教の神である。ニーチェはゾロアスター教に強いあこがれを持っていたのだと思う。ツウラトウストラとは、ドイツ語でゾロアスターのことである。そのゾロアスター教が古代ペルシャからヨーロッパに伝播していたということは、インドに伝播していて何の不思議もない。現在、インドはゾロアスター教信者の数の最も多い国となっている。トルコから西が西方、トルコから東が東方であるから、元来、ゾロアスター教は東方のものである。私は、電子書籍「さまよえるニーチェの亡霊」にも書いたけれど、ゾロアスター教の起源はシヴァ教である。シヴァ教はいうまでもなく、インドの古代宗教である。シヴァ教については、私の論文「御霊信仰哲学に向けて」の第3章第1節に書いたけれど、次のホームページを見ていただきたい。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/sivakyou.pdf>

仏教もそうだけれど、多くの宗教の起源はインドにあるような気がする。絶対秘仏となっている東大寺二月堂の十一面観音(模写図)は珍しい構成だが、類似するものとして、インドのムンバイ郊外にあるカーンヘリー石窟第41窟 十一面観音立像(7、8世紀作の浮彫り)があるらしい。

ゾロアスター教が古代インドから日本に伝播してきたのは、まず間違いがないと思う。実忠は、まちがいなく、ゾロアスター教を日本に持ち込んだと思う。

最後に、この論文を書き終えるにあたって、「大仏開眼の責任者を務めた菩提僊那はインド僧である。」ということと、「今日、ゾロアスター教信者のもっとも多い国はインドであるが、そのインドの中でも、西海岸のマハーラーシュトラ州のムンバイ(旧称ボンベイ)にゾロアスター教の中心地があり、開祖のザラスシュトラが点火したと伝えられる炎が消えることなく燃え続けている。」ということをおきたい。